連続ドラマ 作品タイトル

『独自』

うっぴょー！ マスコミをぶっ壊せ！！

日本、報道の自由度、世界６８位。先進国中最下位。

毎日毎日、大人の事情と忖度にまみれたニュースが出回る日本。
そんな中「独自」記事しか掲載しない新聞社がある。

権力におもねらない、くだらない情報は一切取り上げない、
どこにも忖度しないスタイルを貫く、
その名も「独自新聞社」。

事情と忖度という汚泥の中から真実のみを引きずり出し、
大衆に「ニュースとは何か？」を突きつける。

ニュースから虚構を削り落とした先に残るものはあるか？
それは希望か、絶望か、……新しい世界か。
判断するのは、あなた。

**※独自とは：その新聞社独自の取材に基づく、
他社にない情報を報道した記事の事。**

これは真実を暴く……物語ではない。

世の中には、発言力のある人々や、発信力のあるメディアが生み出す『ニュース』がある。「これは正しい情報だ」と公的に提供されたものを、私たちの多くは「これは正しい情報だ」と流れ作業のようにそのまま受け取る。
しかし、本当にそれでいいのか？

独自新聞の目的は、隠された真実を暴くことでも、知られていないニュースを発掘することでもない。

マスコミからの情報を、思考することなく受け取り、検証もせずに容易に信じる。そんな大衆に、一度疑問を投げかけることが、彼らの最大の目的なのだ。

◯常識なんて通用しない！個性豊かなアベンジャーズ軍団

「独自新聞社」に集められた個性豊かなメンバー。
記者としての社会的使命感など抱きもせず、ただ特ダネを追う快楽に突き動かされている主人公、ハーバード大卒ロジックおばけのデスク、元アイドル、裏社会に顔が利く柔和なおじさんなどなど……バラエティ豊かなクセ強メンバーが集結する。

◯独自が扱うネタは、世界が見て見ぬ振りするニュース

マスコミの行う“公のいじめ”に気付かずに乗っかっている大衆、スポットの当たらないマイナースポーツ選手、誰も検証しようがないブラックボックス的な組織……などなど、フィクションとして描きつつも、私たちが普段見て見ぬふりをしている、あるいは存在に気づいてすらいない様々な問題にフォーカスを当て、問題提起する。

主要登場人物（独自のメンバー達）

早川一（25）

独自新聞社の新人記者。特ダネ命！「剣をペンに持ち替えて社会悪と戦う」そんな使命感なんて、これっぽっちも持ちあわせていない。自分の書いた一面記事が世間をあっと言わせる。その快感だけに突き動かされて日々ネタを追う、ある意味、特ダネサイコ野郎。ちょっと（かなり？）おバカで憎めない一面もある。コミュ力と勘の良さ、フットワークの軽さが売り。（初めは大手の日本新聞社に勤務）

笹月 英美里（26）

独自新聞社の新人記者（早川よりは先輩）。元アイドル。見た目は超可愛いが中身は男顔負け。芸能活動時代、本来のキャラを押し殺し、ちょっと頭の弱いプチ巨乳アイドルで売っていたことに嫌気が差し、ネット配信で鬼ごろしを浴びるように飲みながら芸能界引退を表明。独自には、自ら志願してやって来た。

沢村 遼太郎（54）

独自新聞社のデスク。ハーバード出でニューヨークタイムズで働いていたロジックお化け。
極めて合理的で無駄なことを嫌う。飲みにケーションなんて言語道断。世の中の理不尽なものに対して人一倍憤っている強い正義感の持ち主でもある。車好き。

切原 のり子 (33)

独自新聞社の校閲担当。東大卒。神経質で完璧主義者、冷静かつ分析的。頭は切れるが協調性がないため、一般企業は１週間と持たなかった。超速読者でハリーポッター1巻を30分で読める。どれほどの長文・難文でも、誤字脱字・文法の誤りを瞬時に見抜く、校閲者として無敵の存在。協調性がなくマイルーチンを崩されると烈火のごとく怒る。

神尾 レオ (23)

独自新聞社の記者。電子掲示板「よんちゃんねる」を立ち上げた。SNS上に広がる膨大な不規則情報の中から、必要な情報を瞬時に見つけ出す、インターネット界のトレジャーハンター。

山後（さんご） 誠一 （49）

独自新聞社の記者＆教育担当。一見、虫も殺せない温和なオジサンに見えて、裏社会にも顔が利く、底の知れない人物。笑顔のまま、ヤクザの親分をちびらせるほど恫喝することも。彼を敵に回すことはほぼ人生の終わりを意味する。柔よく剛を制す、最強のネゴシエーター。

古賀 みなみ（29）

大手テレビ局・日帝テレビの記者。早川とは互いに惹かれあうが、次第に独自新聞社と既存マスコミの対立の矢面に立ち、追い詰められていく。

権田原雄三（70）

日本の政治・経済会の闇に未だ一定の影響力を持つフィクサー。
表舞台からは消えていたが、沢村の志に共感し、独自新聞社に資金を提供する。

独自 全体構成

〈メインキャラクター 〉

早川一（25）　：独自新聞社・記者
沢村遼太郎（54）：独自新聞社・デスク
笹月英美里（26）：独自新聞社・記者
神尾レオ（23）　：独自新聞社・記者＆SNS担当
切原のり子（33）：独自新聞社・校閲
山後誠一（49）　：独自新聞社・記者＆教育担当
古賀みなみ（29）：日帝テレビの記者
権田原雄三（70）：独自事業の資金提供者
前島利明（53）：読朝新聞社総裁の右腕

〈第1話　＃新聞アベンジャーズ、発足 〉

「ニュース命！」「デカネタにしか興味が無い！」と、毎回最速で独自をとって来る最強の記者・早川一。頭脳よりも行動力だけはある早川だが、妙に野生の鼻がきく不思議な男。ある日早川は、厚生労働大臣に対して、詐欺会社から献金を受け取っていた件を追求して出禁にされてしまう。さらにこれまであらゆる大臣からの出禁をコンプリートしたせいで、「取材できないなら、記者やってても意味ないだろ」と総務に移動させられる。そんな早川に目を付けたのは、ハーバード卒の元敏腕記者・沢村遼太郎。沢村は、彼が目を付けた有能な記者だけを集めた「独自新聞社」を作ろうとスカウトしてきたのだ。「権力におもねらない。どこにも忖度しない。純然たるファクトだけを読者に叩きつける。そんな新聞がいまの日本にあるか？」と早川を口説く沢村。こうして、六本木のオフィスには、元アイドル・笹月英美里、東大卒の潔癖な校閲・切原のり子、元裏社会にも顔が利く柔和なおじさん・山後誠一、電子掲示板「よんちゃんねる」を立ち上げたZ世代・神尾レオなどなど…一癖も二癖もある6人の記者が集められた。

〈第2話　＃未解決問題 〉

未解決の数学問題、飛鳥問題が証明されたとニュースが流れる。証明した七瀬麗（34）は美人すぎる天才数学者として脚光を浴びるも、国際数学連合から、麗の証明は誤っていると指定を受け、麗は「顔だけ」「色仕掛けで補助金獲ったんだろ」と世間からバッシングを受ける。
しかし、元々麗は記者に証明ができたと明言しておらず、証明途中の数学の説明をしていただけ。記者がろくに裏取りもせず、インパクトを狙って「美人数学者が未解決問題の証明完了！」と報道したのだ。麗は不満。「証明の結果ではなく、印象で私を褒めたり悪く言うのはおかしい。美

人なのは認めるけど」。しかし麗と記者のやり取りの録音データなどはなく、麗の名誉挽回の手立てがない。
元々芸能界にいた英美里は、世間の印象から少しでも逸れると叩かれる、日本の文化が嫌い。早川と共に麗を取材した記者を調べると、その記者は曖昧な裏どりで記事にしてPV数を稼ぐ、ろくでもないネット新聞記者だった。そいつと、その記者を許しPV数に走るネット新聞の働きぶりをニュースとして公開。世論は少し動き、麗もその記者の被害に会っていたのではないか、という意見も出る。
また、数学の証明がいかに難しく時間がかかるものか」というコラムも載っていた。人々は考え始める。「世の中には長い目で見ないと真偽や価値がわからないものもある。インパクトある情報だけ抽出して、決めつけるのは危険かもしれない」と。

〈第3話　＃不法選挙　〉

市長選挙が行われた。自憲党候補、民白党候補、無所属が戦い、自憲党が民白党に競り勝った。しかし自憲党は不法選挙を行っていたのではとネットで噂が流れ、ニュースとして大きくなる。親が陰謀論に狂って家庭崩壊に至ったことから、ニュースに関心を持ったレオは、その噂に反応。最初は陰謀論だと信じて早川と調べるが、本当に不法選挙で票の売買が行われていたことが明らかに。そして自憲党はSNSで捨て垢を使って、不法選挙のニュースは陰謀論だと自衛のために発信していたこともわかる。しかし民白党も不法選挙をしており、しかも捨て垢を使って自憲党を悪く言っていたことも突き止める。不正した両党と、不正を黙るよう金を貰っていた地方新聞、三者をニュースとして取り上げた独自新聞。選挙は異例のやり直し。無所属が勝利するが、そいつはふざけて出馬した迷惑ユーチューバー。馬鹿げた政策を掲げ、市は混乱。
正しい情報を知るだけでは幸せは約束されない。知った情報を用いてどう行動するか次第なのでは？という意識が世間におぼろげに芽生え始める。

〈第4話　＃労働　〉

安価で高質なファッションブランドとして人気の『MASAMURA』。そこでは発達障害や外国人の人々がひどい労働環境で働かされていた。その理由は契約書にあった。薄給を約束する法律違反の契約書が用意され、発達障害の人や外国人は、よく内容や日本語が理解できないままサインさせられてしまうのだ。のり子は許せない。彼女も社会性がなく、発達障害と言われたこともある。
入社以来、外回りをしたことのないのり子が初めて、オフィスを出て取材へ。コミュ障で取材には不向きと思われた。が、発達障害者が取材対象だからこそ、彼女が日々専門書から収集していた、発達障害に対する膨大な知識が活かされ、早川の協力なバディとなる。
また同時に、のり子と早川は、なぜそのニュースが表立って出ないのかを調べる。『MASAMURA』は大手芸能事務所の系列企業だったのでマスコミが忖度していたのだ。その証拠を突き止めた早川はニュースにする。

この頃から各種メディアは独自新聞社を明確に敵として認識する。逆に世間からは、善悪どちらか分からないぽっと出の怪しい存在から、メディアの闇を暴くヒーローに見られてゆく。

〈第5話　＃マイナースポーツ　〉

日本では、サッカーと野球の国際大会でスポーツニュースは持ちきり。しかし日本代表は負け続けている。そんな中、ジムでトレーニングしていた山後は、いつも熱心にダンベルを上げる男性・澤野翔太（30）が、マイナースポーツ・ファウストボールの日本代表だと知る。つい最近、悲願の世界一を達成したのだ。しかし少しもニュースにならない。山後は他のファウストボールの日本代表選手も知る。それぞれ、働きながら…他のスポーツで挫折したけど…など、葛藤を抱えながらも世界一を手にした一流のアスリートだと知る。負け続けている野球やサッカーばかりを取り上げて、ファウストボールを取り上げないのはおかしいと思い、独自新聞で数回取り上げる。社の信用が上がりつつあったので、興味は惹かれる。それでもサッカー、野球の試合が近くなると、すぐ忘れられる。しかし独自新聞を見たスポーツ選手が、ファウストボールの活躍に興味を持ち、YouTubeに澤野を呼んだ。これが話題になり、ファウストボール日本代表の世界一を祝福する人が増加。実はこの展開、山後は最初から狙っていた。実は野球、サッカーのチームが存在する地域に、重点的に新聞を撒いていたのだった。

独自新聞の株が上がったことが面白くない、とある勢力があった。独自新聞が応援するファウストボールの評判を落そうと、反社会勢力を近づける。が、裏社会に強い山後が撃退。
その勢力に繋がりがある男・前島利明（53）は、「独自新聞社に、後ろ暗い過去を持つ奴がいた」とほくそ笑む。

〈第6話　＃記者のキャリア　〉

早川は古賀みなみのことを好きでいた。デートに誘うも、忙しいみなみには予定が合わないと言われ続ける。しかしみなみは独自新聞のことが気になり、会社の内容を聞くため、自分から初めて早川をご飯に誘った。恋が実るかも？と大歓喜の早川。しかしみなみは自社の誠実でない報道姿勢が気に入らず、機会があれば独自新聞に転職を？と考えていたのだ。みなみは早川と話す中で、早川にジャーナリスト精神など全くなく、ただ取材の才能がピカイチなだけだと気づく。デート中、みなみに取材要請が緊急で入る。早川はみなみの社内の出世のため、無理やりみなみの取材を手伝う。法律グレーなやり方で証拠を掴み、みなみに提出。天才で危なっかしく、奇抜な早川や独自新聞の仕事方法は、自分に合ってないと感じたみなみ。「私は私のやり方で、今の会社の報道姿勢を正す」。転職の気がなくなったみなみは時間の無駄だと、デートを中断。早川は、嫌われたのだと思いこみショックを受け、インフルエンザにかかる。

〈第7話　＃沢村の過去　〉

独自新聞社は新しいネタとして、東京地検特捜部のモリカワ問題を受け、裁判所が官僚側の証言を拒否し、裁判を行うことすら拒否した過去の事件を掘り起こす。
「何故裁判が行われなかったか、国が示談にしたのか？」ネタを追っていた当時の新聞記者の記事は揉み消された。その記者こそ、当時ニューヨークタイムズで活躍していた沢村だった。沢村はこの事件をきっかけに、独自を立ち上げる事を決めたのだ。
取材を進める独自メンバーの前に立ちはだかるのは、前島利明（53）。彼は読朝新聞社総裁の右腕として活躍し、その正体はいずれ日本の新聞を皮切りとした各種メディアを買収し、最終的にその電波権を海外プラットフォーマーに売却して多額の利益を得ようと目論む【黒幕】であった。沢村と前島は海外の大学の同期で、報道について熱く議論を交わしていたが、たもとを分かつ存在となった。行く先々で前島の邪魔が入り、一向に取材が進まない。そんな中、沢村は数年越しに前島と対峙することになる。

〈第8話　#独自解体の危機　〉

独自の記事に対して、強烈な圧力をかけてきた前島。沢村は、前島からの妨害を阻止する過程で、彼と対決。そして口論の末、誤って殺害してしまう。しかし前島の目的はまさに「独自の頭に犯罪を起こさせること」であったと後から知る沢村。まんまと前島の策にハマった沢村。彼は自首し、自ら独自新聞社から去る。独自新聞では、沢村の事件（身内の犯罪）を扱うべきかどうか議論が繰り広げられるが、早川は「忖度なく記事にする」と沢村の事件を掲載。それと同じ誌面に、モリカワ問題についてなぜ裁判が行われなかったかの特集記事が組まれ、独自から発行される。身内の犯罪とのダブル掲載に世間は炎上の嵐となり――。

〈第9話　#ブラックボックス　〉

身内の犯罪で国民からの信頼も失い、独自新聞社に対する批判が高まる中、資金提供者の権田原が、突然自殺。トップを失い、資金もつき、バラバラなりかけるメンバー。そんなメンバーを早川が奮起して繋ぎ止める。そして早川はある提案をする。 沢村と権田原を失った独自新聞社に長期戦で戦う力は残っていない。ここで大きな賭けに出ようという。それはとんでもなく巨大で波紋を呼ぶニュースをバラまくというもの。早川は、これまで多くの記者が触れることをタブーとしてきた「日米合同幹部会」について触れる。米軍と閣僚の上層部で過去60年に渡り1600回も行われていながら、一切議事録すら公開されていない謎の会合。そこで日本の全てが決められている。どんな事が決められているのか、そこで行われている“密約体系”について暴こうというのだ。
そして動き出した独自メンバーたち。
ついに特集報道が行われ、世間は独自の記事について良くも悪くも賛否両論で盛り上がる。そして次第に、そのニュースを信じていく国民たちが現われ始め……。

〈第10話　#ニュースとは何か　〉

最終話、大量のドローンが東京都内の上空を飛び回る。いっせいにばらまかれた独自の記事。なんとそれは「日米合同幹部会」の暴露記事は、すべて完全なフェイクニュースだというもの。そしてこれをもって独自新聞社は解散するというものだった。その新聞には、フェイクであることと、たった一行「ニュースを疑え、与えられた情報を疑え、自分で見た世界を信じろ」という文字が書かれていた。彼らの目的は、フェイクニュースを流し、それを信じさせた上ですべてを嘘だと明かし、『与えられる情報を妄信してはならない』という警鐘を鳴らすという大花火を打ち上げることだったのだ。

独自が華麗なる退場をした、その一ヶ月後……。街を歩く人々の足下に、落ちている独自の最後の新聞。それを手に取った通行人は、ふと立ち止まって考える。ニュースって何だろう？　報道って何だろう？　と。

（終わり）

独自一話

【１話登場人物】

早川一（２５）独自新聞社・記者

沢村遼太郎（５４）独自新聞社・デスク

笹月英美里（２６）独自新聞社・記者

神尾レオ（２３）独自新聞社・記者＆ＳＮＳ担当

切原のり子（３３）独自新聞社・校閲

山後誠一（４９）独自新聞社・記者＆教育担当

古賀みなみ（２９）日帝テレビの記者

幸村新（２５）日本新聞社での早川の同僚

三島達彦（５０）日本新聞社での早川の上司

権田原雄三（７０）独自事業の資金提供者

橘　育子（５８）厚生労働大臣

記者たち

ＡＤ

ユニコーン製薬篠田

堂島組組長

組員１

ラーメン屋の客たち

みなみの上司

女子アナの後輩

○独自新聞社・オフィス（朝）

ＰＣ前に座っている早川一（２６）。

傍らに立つ沢村遼太郎（５４）。スマートな三つ揃いスーツ姿。腕にロレックス。

早川「いんすか？　いんすか？！　俺やっちゃって、いいんすか？！」

沢村「唾飛ばすな」

早川「俺、いまビンビンっすよ！」

沢村「無駄口叩くな」

早川「行くぜ……目覚めよ、日本！」

早川の指がエンターキーを押す。

○渋谷・スクランブル交差点（朝）

通勤者で溢れ返る通り。一人が上空を見て、「？」という顔。

○オフィス（朝）

早川「うっぴょーーーー！！！」

○渋谷・スクランブル交差点（朝）

たくさんの通行人が「？」という顔で上を見ている光景の俯瞰。

○下から見た上空（朝）

ドローンから撒かれる大量の紙。その一枚、右上の角がクローズアップ。太い明朝体で『独自新聞』。

○記者会見会場

T「一ヶ月前」

厚生労働大臣・橘育子（５８）の会見。古賀みなみ（２９）が挙手し、当てられる。

大臣、みなみを見て少し口元に笑み。

みなみ「帝日テレビの古賀です。今回の対策で最も重視されている点を教えてください」

橘大臣「一に貧困家庭の支援、二に子育てとキャリア形成を両立できる体制の整備です」

司会者「次は……二列目の青いシャツの方」

青シャツ記者の隣で挙手している早川。

青シャツの記者「現代新聞の山下で」

早川「（遮って）大臣！　ウイフリーって会社、知ってますよね？！」

青シャツの記者「おい！」

司会者「質問は当てられてからお願いします」

早川「そっちが無視してんだろ。俺はずっと手ぇ挙げてんだ。大臣、知ってますよね！？」

橘大臣「（一瞬言葉に詰まり、）も、もちろん」

○橘大臣の回想・テレビの映像

連行される社長の姿。『ウイフリー社長広域詐欺容疑で起訴　被害総額　15億円超』のテロップ。

橘大臣の声「先日からニュースで何度も目にしていますから」

早川の声「ニュースで知ったんじゃないでしょ！　大臣が献金受けてた会社でしょ？」

○回想戻り・記者会見会場

引き攣っている橘大臣の顔。

早川「あんたが貰った金額も知ってんすよ！」

周りの記者たち、ヒソヒソ話。

記者１「またあいつか。ルール守れっての」

記者２「よくやるよ」

記者３「聞いたって、どうせ出せないのにな」

みなみ、早川に軽蔑の眼差し。

○同・廊下

歩いているみなみ。早川が追いついて、

早川「みなみちゃん」

みなみ「（嫌そうに）何ですか？」

早川「橘大臣と仲良しっすよね？」

みなみ「は？」

早川「大臣、みなみちゃんの質問に答える時の態度、明らかに他の記者と違うし。気心知れた相手に喋ってるって感じ」

みなみ「普通です。それと、なれなれしい呼び方しないでください。セクハラですよ」

みなみ、立ち去っていく。

早川「（その背に）大臣がＷＦから金貰ってたの、知ってたんじゃないっすか？！」

みなみ、振り向きもせず、足を速める。

○とあるバー・店内（夜）

童顔美女の笹月英美里（２６）が若い男性と話している。男性に体を寄せて、

英美里「大変なんでしょお？　トダキンさんの現場って。あの人、テレビで見る優しそうな感じと、本性、全然違うって聞いたよ」

男性「そ、それは僕がＡＤとして未熟だから」

英美里「ううん。あなたはよく頑張ってる」

英美里、男性の手を優しく撫でて、）

英美里「この手は頑張ってる人の手だもの。

英美里には、わかるよ（と、上目遣い）」

デレッとなる男性。

テーブルの上に名刺。『独自新聞社記者

笹月英美里』。

○とある釣具店・入口（夜）

壁にもたれてノートＰＣを見ている神

尾レオ（２３）。中年男性が入ろうとする。

レオ「篠田さん」
男性「！」
レオ「ユニコーン製薬の篠田開発部長ですよね。今朝がたオフィスにお電話したら、秘書の方が体調不良と仰ってましたが」
男性「あ、朝はそうだったんだが治って……」
レオ「それはよかったです。じゃ、改めて取材お願いしますね。独自新聞社の神尾です」
と、名刺。『独自新聞社記者　神尾レオ』。
男性「な、なぜ、ここが」
レオ「ヒトの行動パターンって割と決まってるんで、結構、読めちゃうんですよ。（ＰＣを掲げて、）ＳＮＳへの投稿は慎重に、ね。」

○暴力団・堂島組事務所・中（夜）
組長と向き合って座っている山後誠一（４９）、穏やかな笑みを湛えている。組長の両脇に立つ強面の組員たち。組長の背後に『青森万博』のポスター。マスコットキャラのファンシーなイラスト。

組長の前に置かれた名刺『独自新聞社記者　山後誠一』。

山後「（穏やかに）……ミスタードニーのこと、お話していただくわけにはいきませんか？」

組員1「しつけぇなコラ（と、拳銃を出す）」

組長「よせ」

山後、穏やかな笑みを湛えたまま。

組長、山後をじっと見て、

組長「……その服の下はどうなっている？」

山後「いやぁ、寒がりなもので、着ぶくれてまして、恥ずかしいです」

と、ジャケットを脱ぐ。胴体に腹巻のようにダイナマイトを巻いている。

組長・組員たち「！」

ポケットから煙草とライターを出して、

山後「よろしいですか？（と、微笑）」

組長、ビクッと腰を浮かす。

山後「お話していただいて、よろしいですか？ミスタードニーのこと（と、微笑）」

○独自新聞社・オフィス・外観（夜）

薄暗い中に影だけが見える。ボロそうな２階建ビル。１階はシャッターが閉まっている。２階の灯りの中、窓際の机で本を読む切原のり子（３３）の姿が見える。ビル前の駐車場に、それぞれの道から英美里、レオ、山後が集まってくる。少し遅れて沢村がやってくる。

英美里、レオ、山後、沢村を見る。窓際ののり子も、本から顔を上げて、見る。

沢村「……明日、連れてくる。六人目を」

○日本新聞社・社屋・外観

早川の声「なんで総務なんすか！？」

○同・政治部・オフィス

三島達彦（５０）の机を叩いて睨む早川。

三島「あのな。昨日の件で橘大臣から出禁喰らったから、お前（指折り数えながら）官房長官、総務大臣、法務大臣、外務、まあいい

や。全大臣から出禁コンプリートしちゃったわけよ。おまけに、他社からクレーム来て、記者クラブも出禁。取材できないなら、記者やってても意味ないだろ」

早川「記者クラブなんて、どうせ居たって意味ないっす！」

早川を呆れ顔で見ている社員たち。その中に幸村新（２６）。

三島「総務が席あけて待っててくれてんだ。早く行ってやれ」

早川「総務でどうやって特ダネ獲れってんすか！？」

三島「壁新聞でも作れ」

早川、踵を返し、出て行こうとする。

三島「机！　片付けてけ！」

早川「便所っす！（と、出て行く）」

三島、思いきり伸びをする。

幸村「（苦笑）総務、向かないと思いますけど」

三島「ンなこと、上は百も承知。三日ともたずに辞表出すだろ。それが狙いよ」

幸村「助かります。早川が好き勝手するおかげでニチブン全体が札付き扱いされてんで」

他の記者たちも同意の顔。

三島「あいつ、取材力はあるんだけどなあ」

幸村「折り合いってものを知りませんからね」

三島「そうそう。記者ってのは、折り合い、折り合い、たまぁに特ダネ。それでいいのよ」

幸村「……」

○同・男性トイレ・中

小用を足す早川。一つ閉まっている個室。

早川「だー、ムカつき過ぎて小便止まんねー」

幸村が入って来て、

幸村「独り言、デカすぎるし、下品だし」

早川「おう、幸村。俺、総務なんか行かねぇぞ。ンな会社、辞めてやる」

幸村、隣で小用を足しながら、

幸村「で、どこ行くの？　週刊誌とか？」

早川「や、新聞がいい」

幸村「週刊誌のほうが向いてると思うけど」

閉まっていた個室から、バケツとブラシを持った猫背の清掃員が出てくる。目深に被った帽子の下の顔は、沢村である。

早川「（愛想よく）ご苦労様っす」

沢村、会釈。

早川「（洗面台に向かいながら、）週刊誌なんて、特ダネ獲っても内っ側じゃねぇか。新聞一面にドーンと出たほうが目立つだろ」

沢村、ゴム手袋を外してバケツへ。袖口からロレックスがチラ見え。

幸村「……幸せな奴」

早川「（手を洗いながら、）んあ？」

幸村「幸せだよ。特ダネ獲ってドーンと目立つとこに載ればハッピーっていうそのシンプルな思考回路」

沢村、バケツを用具入れにしまい、猫背でドアのほうへ向かう。

早川「それ以外に何があるよ？」

幸村「普通、社会悪と戦うとか」

早川「ンなの警察とかアベンジャーズとかの

仕事だろ」

早川の背後を通って外へ出て行く沢村の姿が鏡に映る。

早川「記者は特ダネ獲ってナンボだっつー（鏡を見て言葉を止め、）……スパイだ」

幸村「え？」

早川「ロレックスつけたまま掃除する奴がいるかよ」

早川の空想。

日本新聞記事一面『エース記者お手柄本社に潜入したスパイを捕獲』。警視総監賞の表彰を受け取る早川の写真。

早川「特ダネだ！」

と、濡れた手のまま飛び出す。

○同・廊下

歩いている沢村。猫背ではない。後ろから早川がタックル。軽くかわす沢村。

早川「（派手に転倒し、）だっ！」

沢村「（見下ろして、）早川一」

早川「（下から睨みつけて）ああ？！」
沢村「うちで働かないか？」
早川、ポカンとする。

○定食屋・店内
壁に設置されたＴＶ、ライトな報道バラエティの司会をやっているみなみが、芸人コメンテイターにいじられて笑う。
男性客２人、ＴＶを見ながら、
客１「コガミナ、昔とずいぶん変わったなぁ」
客２「俺、あんま女子アナ詳しくないんで」
客１「新人の頃はさ。熱血って感じで、記者会見でもガンガン突っ込んだ質問しててて。ほら、望月なんとかって女記者いるじゃん。齢とったら、あんなになりそうだったんだよ」
客２「へー」
客１「腐敗した権力を斬る！　みたいな、さ。ま、人気が出始めたのは、こっちの路線になってからだけど」
テレビ画面。芸人に突っ込まれて笑って

いるみなみ。
テーブル席に早川と沢村。早川は大盛ラーメンと炒飯セット。沢村はおでんだけ。
早川「給料日前なんすか？　食っていいっすよ（と、炒飯の皿を沢村のほうへ）」
沢村「炭水化物は控えている」
早川「そうすか、じゃ（と、皿を引き戻す）」
早川の傍には名刺『独自新聞社デスク　沢村遼太郎』。
早川「おたくも、橘大臣のネタ、追ってたんっすね」
沢村「うちの記者が、行く先々で言われたらしい。『日本新聞の早川という記者にすでに話した』と」
早川、炒飯をがっつきながら、
早川「俺、一番乗り好きなんで。あ、ここ奢りっすよね？」
答えを待たずに店員に手をあげて、
早川「味玉とチャーシュー追加で！」
沢村「一番動きの速い記者を、うちの記者に

する。合理的だ」

早川「便所でロレックス見せたの、わざとっすよね？」

沢村「勘が良いことは確認できた」

早川「ヘッドハンティング、あざっす。でも、ぶっちゃけお断りっす。こんな（と、名刺を見て）聞いたこともない新聞じゃ、燃えないっす。特ダネは読まれてナンボっすから」

沢村「聞いたことがないのは当然だ。まだ何も発行していない」

早川「へ？　それって」

沢村「権力におもねらない。どこにも忖度しない。純然たるファクトだけを読者に叩きつける。そんな新聞がいまの日本にあるか？」

早川「ないっすね多分。いや、絶対」

ラーメンを食べきり、丼を持ってスープを飲もうとする早川。

沢村「だから、創る」

早川、丼を口元で止めて、沢村を見る。

沢村「どこにもない新聞を創る」

早川「それって、特ダネ潰すバカ上司がいないってことっすか？」

沢村「そうだ」

丼を置いて、

早川「……やべ。俺いまビンビンっす」

○日本新聞社・政治部・オフィス

幸村、早川の机の上に散らかっている大量の書類を、段ボールに納めている。傍らに三島。

三島「三日どころか、半日だったな」

幸村「うまく行くわけないですよね、新聞社のスタートアップなんて」

三島「なんつってたっけ？　ナメクジ新聞？」

英美里の声「では、独自新聞社を設立された目的は何なのでしょう？」

○独自新聞社・社屋・外観

裏路地に立つ古ぼけた２階建。壁面には鉄製の外階段。１階のシャッターは閉じ

ている。シャッター脇のポストに貼られた『独自新聞社』の手書きラベル。

駐車場には地味な古い車が一台。

山後の声「（渋い声色で、）我々の最大の目的は、日本を『権力が国民に嘘をつけない国にする』ことです」

○帝日テレビ・社屋・外観

山後の声「元来、ジャーナリズムには権力の監視者たる役割があったはずです」

○同・上昇するエレベータ・内

みなみが、スマホでメールを打っている。

山後の声「しかし、いまやそれは形骸化しています。いえ、最初から日本にジャーナリズムは存在していなかったのかもしれません」

みなみの打ったメール文『全紙全局、確認しました。どこにも出ていませんのでご安心を。』、件名『Re:Re:Re 例の件』、宛先名『橘大臣』。送信。

みなみ「（溜息）」

○独自新聞社・２階・オフィス

中央の応接スペース。

穴だらけで綿の飛び出たソファで、英美里と山後が向き合っている。

山後「我々がまずメスを入れたいのは、記者クラ……」

英美里「ちょちょちょ、もう一回！『しかし、いまや』の後から」

山後「（溜息の後、本来の優しい声になり、）聞き直しがあまり度重なると、相手が臍を曲げてしまいますよ。一度や二度はまだしも」

英美里「難しい言葉ばっかりだし！」

山後「プロの記者は、わからない言葉が出てたらいったん頭に留め、取材後に調べます」

英美里「ウチ、まだ試用期間だし」

山後「（苦笑）プロのやり方を身に着けるために、こうしてロールプレイングをしているんでしょう？」

早川の声「あ、バカボン、そこダメ！」

床に胡坐をかいて将棋を指している早川と権田原雄三（70）。権田原はラクダシャツに腹巻、ステテコ、頭にはタオルの鉢巻き姿。

オフィスの全景。

古そうな事務机が並ぶ、雑然とした室内。壁のいたるところにシミ汚れ。

窓際の一角。整理整頓された机で、分厚い法律専門書を超速読しているのり子。

傍らには山積みの各種専門書籍。その分野は心理学、経済学など多種多様。

別の一角、ヘッドフォンを着けたレオが、大型モニター5台を注視している。

権田原「ダメよダメよも好きのうち。良いではないか、良いではないか、ってな（と、駒を置く）」

早川「ブー！　そやって何でもエロ系に繋げんのは、今時、コンプラ的にアレっすよ」

のり子、キッと睨んで。

のり子「コンプライアンス、です」
早川「あ、了解っす」
のり子「何々系や何々的といった具体性のない言葉や」

○同・駐車場
沢村の車が来て、地味な車の隣に停車。
のり子の声「アレという指示代名詞だけを単独で用いることも」

○同・2階・オフィス・中
早川を睨んでいるのり子。
のり子「癖になりかねませんので、雑談の中とはいえ、安易な使用は控えるべきです」
早川、小刻みに頷く。（言葉を発するのが怖くなっている）
のり子「正しくは、『そのように何でも安易にエロティックな話題と結びつけることは』」
早川、小刻みに頷く。
のり子「続く、今時、という言葉も、どの時

点からどの時点までを指すのか不明確です」

早川、小刻みに頷く。

権田原「赤べこみたいだな」

沢村が入ってくる。

山後「お帰りなさい」

権田原「おお、待っとったぞ」

沢村「権田原さん。ご来社の際は事前に連絡をくださいと」

早川「え？」という顔。

権田原「構わん構わん。儂ぁ、いつでも暇だ。（早川に）悪いな坊主。続きは、まただ」

沢村「下、行きますか」

権田原「おう。じゃ（全員に）気張っていけよ。（早川に）お前さん、見どころあるな。儂の勘は当たる」

早川「あざーす」

出て行く沢村と権田原。

早川「あの人、お客だったんすね」

山後「え？　誰かも知らずに将棋を指してたんですか？」

○同・外階段

降りていく沢村と権田原。

早川の声「なんか暇そうにしてたから、配達係の人とかかなー、って」

山後の声「あの人は、うちに資金提供をしてくださっている権田原雄三さん。要するにパトロンです」

○同・2階・オフィス

早川「知らんかったー。まさかバカボンがそんなエライさんだったとは。あ、バカボンとパトロンて、ちょい似てません？」

英美里「（山後を小突いて）オイオイ、エライぶっとんだ新人来たぞ」

山後「君が言いますかね」

彼らの話の間、ひたすらモニターを注視しているレオ。何ごとか入力して、

レオ「見ぃ～っけ」

早川・英美里・山後「？」

レオ「新人さん。まだ橘大臣のネタ、追っかける気、ある？」
早川「ったり前っすよ！」
レオ「コガミナ、大臣のお友達なんだよね？」
早川「そうっす！　絶対！」
　レオ、手招き。早川、駆け寄る。
　レオ、モニターを指さしながら、
レオ「コガミナと大臣の行動経路、トレースしてみたんだけどさ。ちょうど、重なってんだよねぇ。ＷＦにがさ入れあった日の夜」
早川「それって！」
レオ「あの大臣お豆腐メンタルだから、お友達に相談したんじゃん？　どうしよ～って」
早川「っしゃあ！　あざーっす！」
　早川、外に飛び出していく。
レオ「はっや」
　鉄階段を駆け下りていく足音が響く。
英美里「うっせ」

○同・１階・工場・中

壁も床も、ヒビとシミだらけ。中央に、場違いなほどピカピカの最新型輪転機が設置されている。

沢村と権田原、それを眺めながら、

沢村「例の物は25日に納入予定です」

権田原「うむ。楽しみだな。……楽しみと言えば、あの早川とかいう青年。彼は今日が初出社なんだろ」

沢村「ええ」

権田原「あの物おじのなさ、瞬時に懐に飛び込んでくる人心掌握術。なかなか面白い」

沢村「彼を選んだ最大の理由は、彼が高尚な志を持っていない点です」

権田原「ほう」

沢村「彼のモチベーションは、ただ自分の特ダネで一面を飾りたいだけ。ごくシンプルで即物的です」

権田原「なるほど」

沢村「記者として、希少価値です」

権田原「……確かにな」

○日本新聞社・政治部・オフィス

物がなくなった早川の机の上を雑巾で拭いている幸村。

権田原の声「社会悪と戦うだの権力の腐敗を許さないだの、いわゆるジャーナリズムに憧れて記者になる若いモンは多いが、そういう連中ほど、賞味期限が短いからな」

幸村、ふと、遠い目をする。

○帝日テレビ・スタジオ

バラエティ番組を進行するみなみ。お面のように変わらない笑顔。

権田原の声「報道が大本営発表に等しい我が国では、熱いジャーナリスト魂も、すぐ腐る」

○独自新聞社・1階・工場・中

輪転機を見ている沢村と権田原。

権田原「最初から志なんぞ持ち合わせとらん奴のほうがしぶといかもしれんな。……なん

せ、この国の化物は手強い」

○同・外階段

最下段で勢い余ってカラ足を踏み、ケンケン状態で数歩よろける早川。

沢村の声「万一、我々全員が倒れることがあったとしても、彼だけは最後まで立っている、かもしれません」

よろけた早川、沢村の車にぶつかって止まる。車を見て、何か閃いた顔。

○同・1階・工場

権田原、意外そうな顔で沢村を見て

権田原「お前さんがそんなぼやっとしたことを言うのも、珍しいわい」

シャッターを外から叩く音。

沢村がシャッターを開けると、外に早川。

早川「デスク！　このカッコいい車、貸してほしいっす！（と、沢村の車を指さす）」

○車道を走る沢村の車

○その車内

ハンドルを握っている早川。

窓を開けて風を浴びながら、

早川「サイコー（口笛）」

○独自新聞社・２階・オフィス

レオ、モニターを注視している。

のり子、先ほどとは違う専門書を速読しているのり子。

自席でＰＣに向かっている沢村。眉間に険しい皺を寄せ、張り詰めたオーラ。

英美里と山後、出掛ける支度をしている。

山後「行きますかね」

英美里「はーい。（沢村に）行ってきまーす」

沢村、応えない。

○同・駐車場

英美里、山後、地味な車に乗り込みなが

ら、

英美里「デスクどうしちゃったの？　めちゃ
近寄りがたいオーラ発してたけど」

山後「車を貸したのを後悔しているんでしょ
う。沢村さん、ああ見えて、車をこよなく愛
していますからね」

英美里「マジ？　ヤバくね？　絶対ぶつけそ
うじゃん」

二人を乗せた車、発進する。

○帝日テレビ・ビル前（夕）
出てくるみなみ。

早川の声「みなみちゃん！」
車に片手をかけて立っている早川。片頬
にちょっと土が付着している。

早川「（気障に）いま帰り？　お疲れ」

みなみ「（険しい表情で）あなた」

早川「ドライブしようぜ（キメ顔）」

みなみ「は？……ここ（と、自分の頬を指し
て、）何かついてますよ」

早川「あっ、ハズっ（と、擦り取る）」
車体の側面、擦った跡がある。
みなみ「……擦ってません？」
早川「ああ、ちょっと調子に乗って走ってたらやっちゃって。ダイジョブ、ダイジョブ。壊れてないから」

○道路を走っている沢村の車（夕）

○車内（夕）
運転席の早川。助手席で憮然としているみなみ。
早川「いや～、ダメ元で誘ってみたんすけど、光栄っす。みなみちゃんが俺の車に乗ってくれるなんて！」
みなみ「勘違いしないでください。この際だから、あなたと一度しっかり話しておこうと思っただけです」
早川「ますます光栄っす！」
みなみ「ハッキリ言って、迷惑してるんです。

あなたに記者会見で毎回暴走されて。所属は違えど、記者の仕事はチームプレー。わかります？」

早川「ダイジョブっす。俺もう会見行かないんで。クビになったっす」

みなみ「あ、そうなの？……まぁ、あなたの為にも良かったんじゃないですか。どう見てもあなた、記者、向いてないし」

早川「あ、速攻でヘッドハントされたんで、また記者やってるっす」

みなみ「嘘でしょっ！？　どこの？」

早川「独自新聞社っす」

みなみ「聞いたことないけど」

早川「権力が国民に嘘をつけない国を創る新聞っす」

みなみ「……何それ」

早川「みなみちゃん。橘大臣と」

みなみ「だから、お友達じゃありません！　普通の取材対象と記者の間柄です」

と、早川を睨みつける。

早川「でも、ＷＦの社長が逮捕された日の夜、大臣はみなみちゃんと会ってた」
みなみ「！」

×　×　×

みなみ、憮然としている。
みなみ「……あなたのお仲間の情報収集力が高いということはわかりました。確かに、会っていました。でも、子育て支援対策に関するお話を聞いていただけです」
早川「どんな？」
みなみ「オフレコですから」

そっぽを向くみなみ。

早川「記者会見で俺が騒いだ時、『ニチブンの早川が言ってたのは何の話だ？』って、後追いする奴、誰もいなかったっすよねぇ。大臣あんだけわかりやすくキョドってたのに」
みなみ「……」
早川「こりゃ、あそこの連中、みんな最初から知ってたんだなって思うのが普通っしょ」
みなみ「私は知りません。他の記者に聞いて

みたらどうですか」
早川「どうせ聞くなら、みなみちゃんがいいっす。俺、応援してたし」
みなみ「あなたに応援されても、嬉しくありません」
早川「あ、ダイジョブっす。過去形っすから」
みなみ「は？」
早川「俺、大学ンとき、記者会見中継見てて。みなみちゃん、顔可愛いのに、偉い人にグイグイ尖った質問してて、追い出されたりして、すげー、カッケーって応援してたっす」
みなみ「……」
早川「でもいまは全然そうじゃなくなっちゃったんで、ぶっちゃけもう応援してないっす。なんで変わっちゃったんすか？」
みなみ「……」
早川「あ、怒ったんすか？（ポケットからグミを出して）どぞ」
みなみ「……」
早川「これ好きって言ってたの、なんかの雑

誌で見たっす」

みなみ「（受け取らず）……人の気も知らないで（唇を噛む）」

早川、自分でグミを食べて、

早川「うまっ。あ、もうすぐっす」

みなみ「えっ、何が？」

○区民施設・会議室（夜）

車から降りる早川とみなみ。

みなみ「何なんですか、ここ」

早川「行けばわかるっす」

○同・エントランス（夜）

スタスタ進む早川。怪訝そうに続くみなみ。

早川「２階っすね」

みなみ、壁のボードを見る。各部屋の利用団体名が記されている。『第三会議室ＷＦ被害者の会』。

みなみ「！」

○同・会議室・中（夜）

ウイフリー社の詐欺商法で財産を騙し取られた老人たちが、泣きながら、わが身に起こったことを訴えている。後ろに立って俯き、じっと聞いているみなみ。

みなみ「……」

早川はボロボロと貰い泣きしながら、一人ひとりとハグしている。孫の結婚資金の為に貯めていた貯金を失った老女の話が終わり、

早川「（ハグして）お婆ちゃん、大変だったねぇ。せっかく貯めてたのにねぇ」

老女「振袖買ってやりたかったよぉ」

被害者の一人、みなみの顔を見て、

被害者１「あ、あんた！　テレビで見たことあるよ！」

みなみ「！」

他の被害者たちも続々と気づき、

被害者２「そうだ。ニュースキャスターの古

賀みなみさんだ！」

わらわらと集まってきて、

被害者３「オラの年金、取りかえしてくれ！」

被害者４「悪い奴、こらしめてくれ」

みなみ「あ、あの」

ただオロオロするみなみ。

早川「（叫ぶ）ダイジョーブっす！　おじいちゃんおばあちゃんのお金がどこ行ったのか、ちゃんとこの人が突き止めてくれるっす！」

みなみ、早川を睨みつける。

○走っている車の車内（夜）

鼻水を啜りながら運転している早川。俯いているみなみ。

早川「あのおじいちゃんおばあちゃんたちのお金、社長がキャバ嬢に貢いだ分以外は、ほとんど政治献金に行ってるんすよね」

みなみ「私に聞かないでください」

早川「あ、さっきは『知りません』だったのに、『聞かないでください』になった！」

みなみ、キッと睨んで、

みなみ「上げ足とっていい気にならないで！　あなた何様のつもり！　正義の味方？！」

早川「じゃないっす」

みなみ「（堰を切ったように）政治家が良いことばっかりしてるわけじゃない。そんなの子供でも知ってる。それをマスコミが一から十まで突っついてたら、情報を出してもらえなくなるでしょ。そしたらどうなると思うの！　国民に知らせるべき情報も伝えられなくなる。いまよりもっと政治への関心が薄れて投票率も下がって、日本はどんどん酷い国になる。そんなの嫌なの私は！」

早川「やっぱ。正義の味方はみなみちゃんっすね」

みなみ「は？」

早川「後ろの紙袋、取ってもらえます？」

みなみ、後部座席を見る。紙袋が一つ。取ると、色褪せた冊子一冊と、エアークッションで包んだたくさんの鶏卵が入

っている。文集の表紙『県立第二小学校
卒業文集　平成１８年』。
みなみ「こ、これ（絶句）」
みなみ、震える指でページをめくる。藁
半紙に印刷された子供の作文『３組　古
賀みなみ』。
みなみの小学生時代の姿が重なる。校庭
を走り回っていたり、クラスでハキハキ
と発言していたり。
少女時代のみなみの声「私は困っている人を
助けられる仕事がしたいです。でも、困って
いる人はとてもたくさんいます。一人で皆を
助けるのはむずかしいので、困っている人を
助けようと思う優しい人がたくさん増える
といいと思います。日本をそんな人がたくさ
んいる、いい国にする仕事がしたいです。」
みなみ「……なんでこれ、あなたが。うちに
だって、もうないのに」
早川「先生が大事に持っててくれてたっす」

○早川の回想・小学校・校長室

人の好さそうな教頭から、文集を受け取って頭を下げている早川。

みなみの声「吉永先生が？」

早川の声「教頭先生になってたっすよ」

○回想戻り・車内（夜）

早川「みなみちゃんが可愛がってた鶏の子孫、元気だったっす」

みなみ「（紙袋の鶏卵を見下ろして）……」

みなみ、ゆっくりと窓の外に目をやる。

早川「テレビで見てるって。みなみちゃん立派になったって喜んでたっす」

みなみ「……立派なわけ、ない」

早川「あ、ちなみに車擦ったの、校門の横のブロック塀っす」

みなみ「あそこ、道、狭いから（少し笑う）」

しばし、無言の間があって。

みなみ「お手洗いに行きたいんですけど」

早川「じゃ、そこのコンビニで（と、停車）」

降りるみなみ。
助手席にみなみのスマホ。
見てくださいと言わんばかりに、大臣とのメールが見える画面が開いてある。
早川「！」
すぐに手に取る早川。
件名『Re:例の件』、宛先名『橘大臣』。
早川「（本文読む）『局長も承知です。当方で本件を現在報道されている範囲外で取り上げる予定はないとのこと。』……っしゃあ！」
ガッツポーズして、急いで自分のスマホで、メール画面の写真を撮影。
×　×　×
みなみ、戻ってきて何食わぬ顔で助手席のスマホを取り、仕舞う。車、発進する。
早川「お腹空いたっしょ。飯行きません？」
みなみ「いいです。家でオムレツ作って食べます。卵こんなにあるし」
早川「やったぁ！　俺オムレツ大好きっす！」
みなみ「なんで来る前提なの！？」

早川「ダメっすか」
みなみ「ダメっす。あ、ダメです」
早川「（笑って）感染った。じゃ、今日じゃなくても今度どうすか、ご飯」
みなみ「……まぁ、同業者との意見交換も必要だし……ね」
早川「マジっすかぁ！　っしゃあ！」
みなみ「大袈裟ですね。私のファン辞めたんじゃなかったんですか？」
早川「あれ、嘘っす。いまもファンっす。だって顔超タイプなんで！」
みなみ「（呆れて）あ、そ」
早川「みなみちゃんとご飯！（大げさにのけ反って、）うっぴょー！」
みなみ「ちょっ、前見て！」

○路上

軽く前がへしゃげた車。

警察に聞き取りされている早川。

警察「自損事故で良かったと思いなさいよ」

ぺこぺこ頭を下げている早川。少し離れた後ろ、恥ずかしそうに俯くみなみ。手には卵の入った紙袋。

みなみ「（呟く）割れなくて良かった」

○帝日テレビ・オフィス（朝）

自席で項垂れているみなみ。隣に立っている上司。机上にスポーツ新聞。記事『コガミナ　ドライブデート中に事故？』。

同乗相手は『知人男性』と書かれている。

上司「男と遊ぶなとまでは言わないけどさ。一応、局の看板なんだから、気をつけてよ」

みなみ「……申し訳ありません」

みなみ、上司が立ち去るまで神妙にしているが、後ろ姿に小さく中指を立てる。

○独自新聞社・２階・オフィス（朝）

スポーツ新聞を見ている早川、英美里、レオ、山後。のり子は専門書を速読中。

英美里「ダッサ！」

早川「面目ないっす」
英美里「あれ？　デスク遅いね」
山後「早川くんの顔を見てしまうと殺しかねないので、車が修理から戻るまでは出社しないとのことです」
　早川、身震いする。
英美里「こっわ。クビじゃね？」
早川「いやいやいや。証拠手に入れたんすよ、俺！」
　早川、スマホを出し、みなみのメールの画像を見せる。
レオ「これだけだと証拠としては、弱いかな。献金とかＷＦとかってワードが出てたら良かったんだけど」
早川「ダイジョブっす。この取っ掛かりがあれば、こっからは早いっす。俺、裏取り爆速のハジメちゃんって呼ばれてんで」
英美里「誰に呼ばれてんの？」
早川「俺にっす！（と、駆け出していく）」
　鉄階段を駆け下りる音が響く。

英美里「うっせ」
山後「じゃ、私たちも行きますかね」
英美里「はーい」
立ち上がる２人。
レオ「僕も」
と、モニターに囲まれた自席に戻り、ヘッドフォンを着ける。

○帝日テレビ・オフィス
みなみ、スポーツ新聞をゴミ箱に捨てて、
みなみ「ったく、あのバカのせいで」
ＬＩＮＥメッセージが届く。
確認すると、早川から『メシ、ここどうっすか？』と、お洒落なバーのサイト。
みなみ、『行きません！』と返信。

○モンタージュ
『現代新聞社』の社屋前で張り込む早川。
出てきた社員に駆け寄って声をかける。
×　×　×

飲み屋で、取材対象の男性に話を聞いている英美里。上目遣いで見たり、ボディタッチしたり、めっちゃ色仕掛けを使っている。デレッとしている男性。

×　×　×

喫茶店で、取材対象と穏やかに頷きながら話をしている山後。相手が薄ら笑いで誤魔化した様子。山後、穏やかな笑顔のまま胸倉を掴み、顔を近づけて何事か囁く。相手の顔が真っ青になる。

×　×　×

モニターを注視しているレオ。何か見つけたらしく、ニヤリ。

×　×　×

『産京新聞社』の社屋前で張り込む早川。出てきた社員に駆け寄って声をかける。

○日本新聞社・政治部・オフィス

幸村と三島が話している。

幸村「早川が、橘大臣のネタ、いまだに嗅ぎ

まわってるらしいですね」

三島「ああ、俺も聞いた。ま、好きにすればいいさ。もう、うちの人間じゃないんだから、あいつが何書いて、どんだけ政治家に嫌われようと、こっちに害は及ばない」

幸村「ですね」

○独自新聞社・２階・オフィス（夜）

早川、英美里、レオ、山後、それぞれ自席でＰＣに向かい、一心不乱に文字入力している。いつも通り、超速読で専門書を読んでいるのり子

○同・駐車場（朝）

沢村、破損箇所が綺麗に直った車を運転して来る。

○同・２階・オフィス（朝）

のり子がゲラに爆速で赤入れをしていく。それを見守っている早川、英美里、

レオ、山後。

早川「はえー」

山後「おまけに正確です」

沢村が入って来る。駆け寄る早川。

早川「おはようございます！　車、すんませんっした！（と、深々とお辞儀）」

沢村「……次から気を付けろ」

早川「はいっ！」

のり子「終了です」

早川「っしゃあ！（ガッツポーズ）」

英美里「お疲れンブラント～（と、のり子の肩を揉む）」

のり子「そのような言葉はありません（と、言いながらちょっとだけ嬉しそう）」

固定電話が鳴る。

山後「（出て）はい、独自新聞社です。……あ、はい。ありがとうございます。（切って）例の物、あと10分ほどで到着するそうです」

早川「うっぴょー！！！」

沢村、クールな表情のまま、手首の先だ

けで小さくガッツポーズ。

○帝日テレビ・廊下

歩くみなみ、女子アナの後輩に背中を叩かれ、

後輩「せんぱーい。ドライブデートの彼氏とはどうなってるんですかあ？　今度紹介してくださいよぉ」

みなみ「だから彼氏じゃないってば」

後輩「はいはい（と、立ち去る）」

みなみ「ったく、ほんとあのバカのせいで」

スマホにメール受信。確認する。

差出人『吉永先生』、本文『古賀さん、メールありがとう。とっても嬉しいです。早川さんにもよろしくお伝えください

ね。鶏舎の柵、直してくださったんですよ。』添付写真が２枚。

鶏舎の前で微笑む先生の写真。逃げた鶏を捕まえ、顔から転んでいる早川の写真。

みなみ「……」

○独自新聞社・駐車場〜工場内

並んで立っている独自新聞社一同。工場のシャッターは全開。

トラックが来て、工場内まで入る。

トラックの荷台が開く。積まれているのは、幾つもの保護箱。

一同、ドライバーと一緒に荷下ろしする。

保護箱の一つを丁寧に開封する沢村。

全員、その後ろでじっと見ている。

箱の中にはドローン。

早川、興奮して触ろうとする。沢村、静かに一瞥し、目で抑止。

一同、ドローンの箱を、工場の隅の収納庫にバケツリレーで格納していく。

× × ×

格納が終わる。

早川、スマホを確認し、みなみからのLINEが届いていたことに気づく。

『お酒ナシで普通のご飯のお店でなら、

ＯＫです』。

早川「っしゃあ！　デスク！（沢村に駆け寄り、）車、また借りていいっすか！？」

沢村、早川に正対し、微動だにせず、感情の読めない目で、早川を凝視。

早川「（後退って、）い、いいっす。チャリで」

×　×　×

フル稼働の輪転機。

○河川敷

ドローンのテスト飛行をする早川、英美里、レオ。操縦の順番を奪い合いながら。

○独自新聞社・１階・工場（夜）

輪転機が刷り上げたものを確認し、頷き合う沢村と山後。

○同・２階・オフィス（夜）

自席で、刷り上がったものを確認するのり子。傍らに沢村と山後。顔を上げ、二

人に頷くのり子。

○同・ビル前の通り（夜）

ドローンを抱えて戻って来る早川、英美里、レオ。ちょうどやって来た権田原と、合流。権田原、ビールと菓子類がパンパンに詰まった袋を両手に提げている。

○東京上空（朝）

飛んでいく幾つものドローン。

○独自新聞社・２階・オフィス（朝）

ＰＣ前の早川。隣に立つ沢村。

もっと後ろには、英美里、レオ、山後が立っている。のり子は自席で専門書を開いたまま、早川の背を見ている。

早川「行くぜ……目覚めよ、日本！」

早川の指がエンターキーを押す。

早川「うっぴょーーーー！！！」

○渋谷・スクランブル交差点（朝）

通行人たちの上に、ドローンが号外体裁の『独自新聞』を撒いている。

×　×　×

地方都市の各要所で、同様にドローンから撒かれる『独自新聞』。

×　×　×

『独自新聞』を読む人々の、驚いた顔。

×　×　×

○日本新聞社・政治部・オフィス（朝）

三島、幸村ほか、社員総出で電話対応に追われ、大わらわな様子。

三島「……はい。弊社でも現在、鋭意調査中でして……それは、現時点では何とも……」

机上の『独自新聞』。大見出し『橘大臣と詐欺企業の癒着　マスコミがこぞって隠蔽』。小見出し『五大新聞社、四大TV局すべて事前に把握していた』。

○同・男性トイレ

三島と幸村、洗面台に腕をついて、ぐったりしている。

幸村「仕事になりませんね」

三島「くは～。早川の奴め」

幸村「ターゲットは大臣じゃなくて、俺らマスコミだったんですね」

三島「とにかく、ほとぼりが冷めるまでの辛抱だ」

○ラーメン屋

テレビニュース。スクランブル交差点の映像の上にテロップ。『日本各地でドローンから謎の紙』。

アナウンサー「……一斉にドローンから紙がバラまかれるという珍事が起きました。警察は愉快犯と見て、捜査を進める意向です」

テーブル席に早川、沢村、英美里、山後、のり子。沢村はおでん。他はラーメン。

早川「愉快犯じゃねーっつの！」

と、立ち上がりかけるが、レオが押さえ、

レオ「僕らが目立つのはまだ早いよ」
アナウンサー「続いてのニュースです。橘育子厚生労働大臣が体調不良の為、虎ノ門病院に入院したとのことです」
早川「行くとこ、病院じゃねぇだろうが！」
と、立ち上がりかけるが、レオと英美里が二人で押さえる。
早川「どいつもこいつも。なかったことにするつもりかよ」
山後「折り込み済みです。ここからですよ」
英美里「その為にウチら頑張ったんだもんね」
レオ「黙ってたらほとぼり冷ませると思ったら、大間違いだよん」
のり子、無言で割り箸を折る。感情の見えない目でテレビを注視している沢村。
○渋谷・スクランブル交差点（朝）
通行人たちの上に降る『独自新聞』。
× × ×
地方都市の各要所で、同様にドローンか

ら撒かれる『独自新聞』。

×　×　×

通行人が拾った記事。人気キャスターのトダキンこと戸田欣司郎が、パワハラで多数のスタッフを鬱や自殺未遂に追い込んだ事実をマスコミが見て見ぬふりをしていた、という内容。

×　×　×

大口スポンサーのユニコーン製薬の薬害問題をマスコミが扱うのを避けている、という内容。

×　×　×

『青森万博』のマスコットをデザインした覆面デザイナー・ミスタードニーの正体が暴力団堂島組の組長で、ロイヤリティが組の運営資金にされていたことをマスコミが報じなかった、という内容。

×　×　×

毎日撒かれ続ける『独自新聞』。内容は様々な種類の「マスコミが権力者に都合

の悪い情報を、知りつつ隠ぺいしていた」という事実を暴くもの。

声１「愉快犯ってレベルじゃなくない？」

声２「何でテレビとか新聞が何も言わんの？」

声３「本当のことだからじゃん？」

声４「マスゴミ、ひでー」

声５「ってか、独自新聞って何なん？」

声６「真実を暴く正義の味方とか？」

声７「いやいやいや、超怪しいっしょ」

ＳＮＳにも同様の投稿が流れる。

○帝日テレビ・オフィス

『独自新聞』を手にしているみなみ。

みなみ「（ふっと一瞬だけ笑みを浮かべる）」

○独自新聞社・２階・オフィス（朝）

ＰＣに向かっている早川。

早川「まだまだぁ！」

エンターキーを押す。

早川「うっぴょー！！！」（一話　終）